



## 高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究：尺度構成，2種類の攻撃行動との関連ならびに下位類型の検討

著者	濱口 佳和，藤原 健志
雑誌名	教育心理学研究
巻	64
号	1
ページ	59-75
発行年	2016
権利	一般社団法人日本教育心理学会 The Japanese Association of Educational Psychology
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00145451">http://hdl.handle.net/2241/00145451</a>

doi: 10.5926/jjep.64.59

# 高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究

—— 尺度構成, 2種類の攻撃行動との関連ならびに下位類型の検討 ——

濱 口 佳 和\* 藤 原 健 志\*\*

本研究は, 高校生用の自記式能動的・反応的攻撃性尺度の作成, 能動的・反応的攻撃性と身体的攻撃・関係性攻撃との関連, 能動的・反応的攻撃性類型の心理・行動的特徴を明らかにすることを目的として行われた。高校1～3年生2,010名に対して, 中学生対象に開発された自記式能動的・反応的攻撃性尺度を実施し, 探索的因子分析を実施したところ, 中学生同様の6因子が得られた。検証的因子分析の結果, 仲間支配欲求, 攻撃有能感, 攻撃肯定評価, 欲求固執からなる能動的攻撃性と報復意図と怒りからなる反応的攻撃性の斜交2因子モデルが高い適合度を示した。6下位尺度については, 攻撃肯定評価でやや低いものの, 全体として高い信頼性が得られ, 情動的共感尺度や他の攻撃性尺度等との相関により併存的妥当性が実証された。重回帰分析の結果, 性別と能動的・反応的攻撃性によって, 身体的攻撃の約40%, 関係性攻撃の約30%が説明されることが明らかにされた。クラスター分析の結果, 能動的攻撃性・反応的攻撃性共に高い群, 反応的攻撃性のみが高い群の2種類の攻撃性の高い群が発見され, Crapanzanoの重篤モデルを支持する結果が得られた。

キーワード: 能動的・反応的攻撃, 高校生, 身体的攻撃, 関係性攻撃, 重篤モデル

## 問題と目的

警察庁の平成26年度上半期の統計では, わが国における犯罪少年は, 刑法犯検挙人員数23,103人, 少年1,000人あたりの人口比は3.2で, 12年連続で減少傾向にあるという(警察庁生活安全局少年課, 2014)。全体的な傾向としては, 少年の反社会的問題は鎮静化する方向に向かっているものの, 依然として少年による凄惨な殺人事件は発生し, 成人と比較した刑法犯検挙人員の人口比の高さ, 少年の再犯率や知能犯・性犯罪の増加, 街頭犯罪における少年比率の高さなど, 憂慮すべき状況もある(警察庁生活安全局少年課, 2014; 警視庁生活安全部少年育成課, 2013)。犯罪少年の検挙人員数は最近では中学生と高校生でほぼ拮抗しているが, 従来から高校生が多い。刑法犯罪ほど重篤ではないまでも, ネットいじめやデートDV等は高校生の仲間関係や恋人間でも少なからず発生しており(藤・吉田, 2014; 横浜市民民力推進局, 2008), 比較的身近な逸脱行動から犯罪のレベルに至るまで, 高校生の攻撃の問題への理解と対応が求められている。

児童・生徒の攻撃の問題行動の心理学的な理解にとって, 能動的攻撃(proactive aggression)と反応的攻撃(reactive aggression)の概念は1つの重要な視点を提供し得る(濱口, 2005a)。人や動物の攻撃行動は, その機能の観点から, 能動的攻撃(proactive aggression)と反応的攻撃(reactive aggression)の2種類に大別される(Dodge, 1991)。これらは従来, それぞれ道具的攻撃(instrumental aggression)と敵意的攻撃(hostile aggression)と呼ばれてきた概念である(Feshbach, 1964)。能動的攻撃は人を傷つけること以外の何らかの目標を達成するために, その手段として行為者自らが自発する攻撃行動である。合目的的で組織化された行動で, 遂行時に怒りの感情の表出を通常伴わない。反応的攻撃は, 欲求阻止や知覚された脅威によって引き起こされ, 自己を守り, 脅威の対象に攻撃を加えること自体を目的として行われる攻撃である。通常, 怒りの表出や癩癪を伴い, 感情表出的で, コントロールされていない攻撃行動である(Dodge, 1991)。Dodge & Coie (1987)は, 児童の攻撃行動の個人差を, 能動的攻撃と反応的攻撃の2次元によって測定可能な, 簡便で信頼性・妥当性のある教師評定尺度を開発した。その後, この尺度を用いて多くの研究が行われてきた。これらの研究では, 能動的攻撃と反応的攻撃は高い相関を示しながらも, 異なる攻撃行動の次元であること(Poulin & Boivin, 2000a), 能動的攻撃と反応的攻撃は, 仲間関係(Poulin &

\* 筑波大学人間系心理学域  
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1  
筑波大学人間系心理学域  
yhama@human.tsukuba.ac.jp

\*\* 筑波大学人間系

Boivin, 2000b), 社会的スキル (Day, Bream, & Pal, 1992), 社会的情報処理 (Dodge, Lochman, Harnish, Bates, & Pettit, 1997), 心理社会的不適応 (Brendgen, Vitaro, Tremblay, & Lavoie, 2001; Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oligny, 1998), 気質や親の養育行動 (Xu, Farver, & Zhang, 2009) と、それぞれ異なった関連を示すことが明らかにされている。また近年、青年向けの自己評定式の尺度が開発され、青年や成人を対象とした研究も行われるようになり (Raine, Dodge, Loeber, Gatzke-Kopp, Lynam, Reynolds, Stouthamer-Loeber, & Liu, 2006), 一般児童・生徒のサンプルだけでなく、非行少年や成人の犯罪者までを対象に含みながら、パーソナリティ変数やパーソナリティ障害傾向との関連の検討が行われている (Cima, Raine, Meesters, & Popma, 2013; Seah & Ang, 2008; Swogger, Walsh, Houston, Cashman-Brown, & Conner, 2010)。これらの先行研究では、反応的攻撃の高さは、親密な相手に対する攻撃行動、仲間からの拒否、不安や抑うつなどの内在化問題傾向、衝動性の高さ、曖昧な状況での敵意帰属などに関連し、精神病型パーソナリティ障害に結びつきやすいこと、一方、能動的攻撃は、類似した相手とのグループ化、非行傾向・暴力犯罪、CU (callous-unemotional) 特性、誇大型自己愛傾向、サイコパシー傾向との関連が明らかにされている。

欧米の研究では、攻撃行動の特徴から能動的攻撃・反応的攻撃を測定するアプローチをとっている。これらの測度では、ひとつの項目のステイトメントが「状況＋行動」(反応的攻撃)あるいは「行動＋意図」(能動的攻撃)というフォーマットで構成されている。Dodge & Coie (1987) の教師評定尺度も Raine et al. (2006) の自己報告形式の尺度も、信頼性と妥当性を備えており、既に多くの研究で使用され、一定の成果を挙げている。しかしながら、項目中の攻撃行動が、直接的な怒りの表出、暴力・威嚇、恐喝や器物損壊などの反社会的行動などに偏り、しばしば男性に偏ったサンプルが用いられることに加え、本来2つの攻撃行動の差異をもたしている内的メカニズムに関わる要因を殆ど測定していないという問題点がある。特に攻撃行動の予防教育や心理臨床的介入においては、攻撃行動を導く内的メカニズムの観点から個人の特徴を把握することは、対象者の攻撃行動の見立てや、プログラムの立案にとって重要であるが、既存の尺度ではこうした要請に応じることができない。

濱口 (2005b) と濱口 (2007) は、上述の問題意識に立脚し、能動的攻撃と反応的攻撃の定義を元に、それぞれの攻撃行動を導きやすい認知、感情、欲求を理論的

に特定し (濱口, 2005a), その内的特性のセットを能動的攻撃性 (proactive aggressiveness) ・反応的攻撃性 (reactive aggressiveness) と概念化し、測定具の開発を行っている。これらは中学生用の自記式の尺度であるが、高い信頼性と Dodge & Coie (1987) の教師評定の行動尺度による収束の妥当性が確認されている。濱口・石川・三重野 (2009) はこれらの尺度を用いて<sup>1</sup>中学生の心理社会的不適応との関連を検討し、反応的攻撃性が抑うつ傾向と、能動的攻撃性が反社会的行動欲求とそれぞれ特異的に関連することを見出している。この結果は、Dodge & Coie (1987) や Raine et al. (2006) の尺度を用いた諸研究と一致するものであり、内的特性の観点から能動的攻撃・反応的攻撃の個人差に迫る濱口 (2005b) のアプローチが妥当であることを示す証拠となっている。

既に見たように、能動的攻撃・反応的攻撃の個人差は、青年期、成人期における心理社会的不適応やパーソナリティ障害傾向と密接な関連があるため、内的特性に焦点を当てたアプローチにおいても、青年期全般と成人期にわたる信頼性と妥当性を備えた尺度の開発が望まれる。濱口 (2005b) ・濱口 (2007) の尺度はいずれも、中学生を対象に開発され、信頼性・妥当性が検討されたものである。既存の攻撃性尺度による研究では、中学生と高校生では、身体的攻撃・間接的攻撃において有意差が認められることなどが知られており (秦, 1990), 文部科学省の統計では、1,000 人あたりの暴力行為発生件数やいじめの発生認知率において大きな差があることが知られている (文部科学省, 2014)。これらの事実を考慮すると、攻撃性について中学生と高校生とで差異がないことを前提に、因子パターンや信頼性・妥当性について検討しないまま、濱口 (2005b) ・濱口 (2007) の尺度を高校生に適用するのは適切とは思えない。そこで本研究では第1に、中学生用に開発された自記式能動的攻撃性尺度と自記式反応的攻撃性尺度を用いて、高校生に使用可能な尺度を作成し、その因子パターン、信頼性、併存的妥当性を検討することを目的とする。

併存的妥当性の検討に際して、反応的攻撃性の下位尺度については秦 (1990) の敵意的攻撃インベントリーの敵意と苛立ちを使用する。敵意は周囲の人々に対する敵意や猜疑心の強さを表しており、周囲との何らか

<sup>1</sup> 濱口ら (2009) では、濱口 (2007) の自記式反応的攻撃性尺度のうち、信頼性と妥当性に十分な根拠が得られなかった外資的認知を含めずに使用している。そこで本研究でも、濱口ら (2009) と同様に、反応的攻撃性2下位尺度、能動的攻撃性4下位尺度を統合して使用することにした。

の葛藤・軋轢から反応的攻撃を誘発する認知と考えられる。苛立ちは些細な不快刺激で怒りが喚起されやすい傾向を表し、反応的攻撃を誘発する感情的要因と考えられる。よって本研究における反応的攻撃性の下位尺度と正の有意相関が予想される。能動的攻撃性の併存的妥当性については、近藤(2004)の非行接近/抑制尺度の自己中心性と登張(2003)の青年用多次元共感尺度の共感的関心(情動的共感)を用いる。能動的攻撃性は自己の欲求充足のために他者を傷つける傾向の強さを表すので、自己中心性とは正の有意な相関が予想される。また、能動的攻撃の高い子どもは他者の感情表出に直面した際に、喚起される感情が弱く(Eisenberg & Fabes, 1992)、他者が表出する苦痛に対する情動的共感が低いとされている(Arsenio & Lemerise, 2001)。このことから、能動的攻撃性各尺度は、共感的関心との負の有意な相関が予想される。

第2に、高校生において能動的・反応的攻撃性と身体的攻撃・関係性攻撃との関連を明らかにすることを目的とする。攻撃行動はその形態面から、身体的攻撃、言語的攻撃、関係性攻撃等に分類される。身体的攻撃は殴る、蹴る、突き飛ばすなどの暴力を、関係性攻撃は、無視、排除、陰口・噂の流布など、他者の人間関係や被受容感を損なう攻撃をそれぞれ示す(Crick & Grotpeter, 1995)。いずれの形態の攻撃行動にも、機能的観点から見た時に、能動的攻撃と反応的攻撃の両者があり得る(濱口, 2005a; Little, Jones, Henrich, & Hawley, 2003)。しかし、身体・関係性それぞれの攻撃行動が、能動的攻撃性・反応的攻撃性によってどの程度規定されるのか、またそれぞれの攻撃性のどのような側面に規定されるのかは明らかにされていない。そこで、本研究で作成される高校生用の能動的・反応的攻撃性尺度を独立変数、既存の身体的攻撃(敵意攻撃インベントリーの身体的暴力; 秦, 1990)と関係性攻撃の尺度(櫻井, 2002)を従属変数として重回帰分析を行い、関連性を明らかにする。

ところで、従来の能動的攻撃・反応的攻撃の研究では、2つの攻撃行動のどちらが優勢であるかによって、子どもを高能動的攻撃群、高反応的攻撃群、能動・反応両高群の3類型に分け、類型間の心理・行動上の差異の検討が行われてきた(Brendgen et al., 2001; Day et al., 1992; Dodge et al., 1997; Vitaro et al., 1998)。しかし近年、能動的攻撃尺度の平均点が反応的攻撃尺度の平均点よりも通常かなり低いことから、能動的攻撃が高い人物は希少であり、能動的攻撃の高さこそ攻撃性の重篤さを示すマーカーであるとする指摘がなされている

(Crapanzano, Frick, & Terranova, 2010)。能動的攻撃と反応的攻撃の相関の高さから、高能動的攻撃群には反応的攻撃の高さが併存しやすく、それが従来の能動・反応両高群となり、反応的攻撃だけが低い高反応的攻撃群は、能動・反応両高群に次ぎ2番目に攻撃的な群であるとする仮説が提唱されている。この仮説は「重篤モデル(severity model)」と呼ばれ、質的に異なった3タイプの高攻撃群が存在するという従来の類型論ではなく、攻撃性の重篤な能動・反応両高群と比較的軽い高反応的攻撃群の2群の存在を仮定し、能動的・反応的攻撃尺度の得点にK-means法のクラスタ分析を実施した研究により支持されている(Crapanzano et al., 2010; Stickley, Marini, & Thomas, 2012)。これらの研究では、1クラスタ解からおよそ5クラスタ解まで順次求め、その過程で、能動・反応両高群、高反応的攻撃群、低攻撃群の3群は発見されるが、能動的攻撃だけが低い群は見出されていない。これらの研究は280名程度の公立学校の生徒や、150名程度の留置場収容者が対象となっており、より偏りのない大規模なサンプルでの検証が課題となっている。そこで本研究では、一般の公立高校から大規模なデータを収集し、クラスタ分析を実施することにより、内的特性の観点から能動的・反応的攻撃性にどのようなタイプが存在するのか、そしてタイプごとの心理的・行動的特徴を明らかにすることを第3の目的とする。能動的・反応的攻撃性の類型間の特徴は、心理的特徴については、妥当性検討でも使用する敵意攻撃インベントリーの敵意と苛立ち(秦, 1990)、非行接近/抑制尺度の自己中心性(近藤, 2004)、青年用多次元共感尺度の共感的関心(登張, 2003)に、さらに認知的共感を測定する「気持ちの想像」を加えて検討する。また行動的特徴については敵意攻撃インベントリーの身体的暴力(秦, 1990)と関係性攻撃尺度(櫻井, 2002)、適応的行動として向社会的行動尺度(横塚, 1989)と肯定的な主張行動である青年用自己表明尺度の「限界・喜びの表明」(柴橋, 2001)を使用する。

## 方 法

**調査対象者** 茨城県南部15校の県立高校1～3年生2,010名が対象となった。2つのサブ・サンプルが構成された(Table 1)。サンプル1(S1)は、職業高校1校を含む7校の生徒611名(男子319名, 女子292名)、サンプル2(S2)は職業高校2校を含む8校の生徒1,399名(男子626名, 女子773名)であった。それぞれのサンプルには進路多様校・中堅校・進学校が含まれている。各サンプルには異なる構成の質問紙が実施された。



Table 1 調査対象者内訳

		1年生	2年生	3年生	合計
サンプル1	男子	131	116	72	319
	女子	132	116	44	292
	全体	263	232	116	611
サンプル2	男子	241	244	141	626
	女子	272	304	197	773
	全体	513	548	338	1399
合計	男子	372	360	213	945
	女子	404	420	241	1065
	全体	776	780	454	2010

**調査内容** S1, S2の質問紙にはともに下記①②の尺度が含まれたが, S1の質問紙にはこれに加えて③の敵意と苛立ち, そして④, ⑤が, S2の質問紙には③の身体的暴力と⑥, ⑦, ⑧の各尺度が含まれた。

①自記式能動的攻撃性尺度 (SPAS-J): 濱口 (2005b) の30項目の尺度で, 仲間支配欲求8項目, 攻撃有能感8項目, 攻撃肯定評価9項目, 欲求固執5項目「はい (4)」、「どちらかと言えばはい (3)」、「どちらかと言えばいいえ (2)」、「いいえ (1)」の4段階評定。元は中学生用に開発されたが, 項目内容から高校生にも適用可能と判断し使用した。

②自記式反応的攻撃性尺度 (SRAS-J): 濱口 (2007) の怒り (5項目) と報復意図 (7項目) の2下位尺度12項目。「いいえ (1)」、「どちらかと言えばいいえ (2)」、「どちらかと言えばはい (3)」、「はい (4)」の4段階評定。これも元は中学生用に開発されたが, 高校生にも適用可能と判断し使用した。元の尺度には「外責的認知」5項目が含まれたが, 信頼性が比較的低く, 妥当性の根拠も十分でないため, 本研究では使用しなかった。なお, ①と②の2つの尺度は教示も選択肢も同一で, 攻撃性の2側面を測定する尺度であるため, 1つの設問にまとめられた。

③敵意的攻撃インベントリー: 秦 (1990) による6下位尺度54項目の内, 敵意 (10項目), 苛立ち (8項目), 身体的暴力 (10項目) を使用。「そうだ」～「ちがう」の5段階評定。

④非行接近/抑制尺度: 近藤 (2004) による5下位尺度24項目の内, 非行接近尺度の自己中心性 (6項目) のみ使用。「あてはまる」～「あてはまらない」の4段階評定。

⑤青年用多次元共感尺度: 登張 (2003) による4下位尺度28項目の内, 共感的関心 (13項目), 気持ちの想像 (5項目) のみ使用した。前者は共感の情動面を, 後者は認

知面を表すものと位置づけられる。

⑥関係性攻撃尺度: 櫻井 (2002) の11項目 (「とてもよくあてはまる」～「まったくあてはまらない」の5段階評定) を使用した。

⑦向社会的行動尺度: 横塚 (1989) から, 友人に対する向社会的行動を9項目抜粋して使用した。「やったことがない」～「いつもやった」の5段階評定。

⑧青年用自己表明尺度: 柴橋 (2001) の限界・喜びの表明 (8項目) を使用した。「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の4段階評定。

**実施手続きと倫理的配慮** 質問紙は学級単位の集団一斉方式で担任教師により実施された。質問紙の表紙には, 回答は任意であること, 回答したくない項目には回答しなくてよいこと, 途中でやめたとしたらやめてもよいこと, 学校の成績には無関係であること, 無記名調査であり, 個人の回答は誰にも開示されないことが記されており, 実施に際して担任教員が口頭で教示した。質問紙への回答をもって, 本研究への協力の許諾とみなした。本研究は当時の筆頭著者の所属大学院の研究倫理委員会の承認を得て行われた。

**調査実施時期** 2007年1月～2月に実施された。

## 結 果

### 能動的・反応的攻撃性尺度の因子分析と尺度構成

SPAS-JもSRAS-Jもともに中学生用に作成された尺度である。これを高校生用の尺度として構成する目的で, 因子パターンを検討するため, S1・S2両サンプルのデータを用いて, SPAS-Jの30項目とSRAS-Jの12項目の合計42項目について主因子法による因子分析を実施した。因子抽出においては, 2つの原尺度の下位尺度合計が6であったため, 6因子指定を行った。その結果, 固有値1.00以上の因子が6抽出され (固有値: 9.78, 3.15, 2.61, 1.89, 1.83, 1.66), 累積寄与率が49.81%となった。プロマックス回転を行ったところ, Table 2に示す因子パターンが得られた。

第1因子は, 「自分がたのめば, どんなお使いでもしてくれる仲間がほしい」など, 原尺度の仲間支配欲求の項目が高い因子負荷量を示し, 原尺度同様仲間支配欲求と命名された。第2因子は, 「うるさいことを言う人でも, わたしがきついことを言えば, だまってしまう」に高い因子負荷量があり, 言語的攻撃, 身体的攻撃, 関係性攻撃の行使によって, 他者との葛藤を自己に有利に解決できるという自信を表す因子と解釈できる。原尺度の攻撃有能感と同じ因子と解釈された。第3因子は「ひどいことをされても, しかえししようと

Table 2 SPRAS-H の項目平均と標準偏差ならびに因子分析結果（6 因子解）

項 目	平均	SD	因 子 負 荷 量					
			F1	F2	F3	F4	F5	F6
仲間支配欲求								
38 仲間を自分の思うとおりに動かしたいと思う	1.69	0.86	.85	-.05	.02	-.03	.02	-.03
18 自分がやりたくないことを、何でもかわりにやってくれる仲間がほしい	1.88	0.91	.83	-.11	-.02	-.01	-.02	.00
11 自分がたのめば、どんなお使いでもしてくれる仲間がほしい	1.82	0.92	.83	-.04	-.03	-.03	-.03	-.04
32 自分が思うように人を働(はたら)かせるのは、いいきもちだ	1.88	0.92	.70	-.02	.09	-.09	.02	.02
4 自分の思いどおりに動いてくれる仲間がほしい	2.29	0.98	.68	-.04	.04	.03	-.01	-.14
25 仲間が自分の言いなりになるのは、ゆかいだ	1.66	0.84	.68	.04	.04	-.04	.04	.06
40 他の人の親友でも、自分が気に入ったら独占したいと思う	1.68	0.88	.37	.15	-.05	.11	.11	-.07
47 電車やバスですわっている時に、ぐあいの悪そうな人が前にいても、自分の席はゆずりたくない	1.44	0.72	.29	.03	-.06	.06	.00	.18
攻撃有能感								
12 うるさいことを言う人でも、わたしがきついことを言えば、だまってしまう	1.79	0.79	-.17	.79	.02	-.06	.01	-.06
5 わたしがきついことを言えば、だいたいあいてはひきさがる	2.09	0.83	-.19	.70	.05	-.02	.01	-.12
39 仲間をおどして言うことをきかせるのは、かんたんだ	1.36	0.67	.11	.60	-.02	.00	-.02	.12
41 何かもめた時、ことばで相手を言い負かすのはとくだ	2.08	1.02	-.20	.58	.12	-.03	.04	-.05
19 うるさいことを言う人は、わたしが少し乱暴なことをすれば、何も言わなくなる	1.60	0.74	.13	.57	-.02	.00	-.01	.05
33 わたしが「仲間はずれにする」と言えば、相手はだいたい言うことをきく	1.38	0.64	.20	.56	-.11	.03	-.04	.11
26 わたしがみんなによびかけて無視すれば、うるさいことを言う人でも、だまらせる	1.46	0.70	.17	.56	-.03	.00	-.05	.04
43 わたしにはよく言うことをきく子分がいる	1.31	0.65	.19	.52	-.08	.01	-.01	.08
42 わたしは、仲間の中ではリーダーのようにふるまいたい	1.79	0.87	.23	.33	.00	.03	-.02	-.08
報復意図								
29 ひどいことをされても、しかえししようとは思わない*	2.53	0.98	-.07	-.13	.87	-.04	.01	.08
1 いやなことをされたとしても、やり返そうとは思わない*	2.42	0.97	-.06	-.01	.75	-.04	-.01	.06
8 乱暴なことをされたら、同じくらいひどいめにあわせたい	2.45	1.08	.08	.00	.73	.02	-.07	-.03
15 いやなことをされたら、倍にして返したい	2.18	1.09	.05	.04	.69	.10	-.01	-.02
22 じゃまをされたら、やり返さずにはいられない	2.16	0.96	.04	.10	.60	.05	.10	-.03
37 仲間はずれにされたら、何かしかえしをしたくなる	2.35	1.05	.10	.11	.53	.08	-.06	-.14
36 文句を言われたら、逆に相手をやっつけたくなる	2.22	0.97	.04	.18	.49	.10	.07	-.08
怒り								
9 いったん腹を立てると、なかなかおさまらない	2.33	1.01	-.01	-.04	-.02	.88	-.07	.08
2 怒りは長く続くほうだ	2.25	0.98	-.04	-.05	-.06	.86	-.03	.09
23 頭にきたことは、いつまでも忘れない	2.29	1.03	.05	-.05	.03	.59	.03	-.04
30 ちょっとしたことでも、カッとなりやすい	2.40	1.00	-.02	.00	.10	.50	.01	-.04
16 腹が立つ時は、おさえきれないほど、怒りがこみあげる	2.39	1.02	-.10	.09	.18	.49	.06	-.03
欲求固執								
14 人をおしのけてまで、ほしい物を手に入れようとは思わない*	1.72	0.88	.00	-.09	.03	-.04	.72	.07
7 どんなにほしい物でも、力づくで手に入れようとは思わない*	1.60	0.84	-.02	.03	-.08	.01	.71	.00
21 ほしい物は、うでずくでもとる	1.56	0.78	.09	.14	-.09	.07	.65	-.03
35 人がどう思おうと、ほしい物は手に入れたい	2.14	1.00	.11	.05	.02	.00	.54	-.07
28 ほしいものを奪い合うのは醜いことだ*	2.00	0.94	-.09	-.12	.12	-.08	.44	.15
攻撃肯定評価								
27 乱暴なことをする人は、仲間にけいべつされる*	1.66	0.78	-.05	.01	-.11	.06	.06	.61
20 無視や仲間はずれをする人は、仲間から信頼されない*	1.56	0.79	-.02	-.04	-.04	.08	.00	.50
6 仲間にきついことを言う人は、みんなにいやがられる*	1.95	0.86	-.19	.05	-.11	-.01	.05	.41
45 どんな理由があっても、暴力は許されない*	2.05	1.02	-.06	-.02	.34	-.11	.01	.40
44 少したたいたくらいでは、あいての心はきずつかない	2.02	0.98	.13	.15	.14	-.06	-.09	.36
46 どんなにきらいなあいてでも、無視することはいけなことだ*	1.97	0.97	.05	-.07	.26	-.01	.03	.33
13 少しきついことを言っても、相手の心はきずつかない	1.75	0.83	.08	.21	.04	-.04	-.03	.33
34 だれかとけんかになった時、あいての言い分もきくようにしている*	1.80	0.82	.16	-.22	.05	.12	.05	.27
*は逆転項目			F1	F2	F3	F4	F5	F6
		F2		.61				
		F3		.61	.40			
		F4		.33	.28	.47		
		F5		.41	.32	.42	.25	
		F6		.27	.16	.20	-.08	.26

は思わない(逆転項目)」等に高い因子負荷量があり、原尺度の報復意図に対応する因子と解釈された。第4因子は「いったん腹を立てると、なかなかおさまらない」等に高い因子負荷量があり、怒りの強さ、持続性、怒り易い傾向を反映しており、原尺度の「怒り」に対応する因子と解釈された。第5因子は「人をおしのけてまで、ほしい物を手に入れようとは思わない(逆転)」などに高い因子負荷量があり、自分の欲求にこだわり、その充足のためには手段を選ばない傾向を表す因子で、原尺度同様「欲求固執」と解釈された。第6因子は、「乱暴なことをする人は、仲間にけいべつされる(逆転)」等に比較的高い因子負荷量があり、攻撃行動の否定的な影響を悪くとらえない傾向を表す因子で、原尺度同様「攻撃肯定評価」と解釈された。以上の様に、高校生を対象とした場合でも、中学生と同じ因子が抽出され、中高生で能動的攻撃性・反応的攻撃性の因子パターンは同じであることが確認された。

高校生の能動的・反応的攻撃性6因子の各下位尺度を構成した。各因子に.30以上の因子負荷量を示す項目を構成項目とし、構成項目の単純合計を各尺度の得点とした。攻撃有能感のNo.42の因子負荷量は.33であったが、元は仲間支配欲求に属していた項目であったので、内容的妥当性の観点から除外した。中学生用尺度と比べると、仲間支配欲求で1項目、攻撃肯定評

価で2項目少なく、全部で39項目となった。若干ではあるが構成項目が異なるので、本研究で作成された尺度は、自記式能動的・反応的攻撃性尺度(高校生用: Self-report Type Proactive-Reactive Aggressiveness Scale for High School Students: SPRAS-H)と呼ぶ。尺度の信頼性の検討のためにクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。Table 3に各下位尺度の $\alpha$ 係数と全体ならびに男女別の平均と標準偏差を示す。6下位尺度を従属変数としてMANOVAにより性差を検討したところ、性別の多変量主効果が有意となった(Wilksの $\lambda=0.81$  ( $F(6, 2003)=76.14, p<.001$ ))。一変量の分散分析を行った結果、すべての下位尺度で有意となり、怒りでは男子より女子が有意に高かったが、その他の全ての下位尺度では男子が有意に高かった。6つの下位尺度の相互相関をTable 4に示す。攻撃肯定評価と怒りとの間には殆ど相関がなかったが、それ以外は低～中程度の有意な正の相関があり、特に報復的意図と怒り、仲間支配欲求と攻撃有能感との間には男女とも最も高い正の有意相関が見られた。

高校生の能動的・反応的攻撃性の高次因子分析 先に見たSPRAS-Hの6因子は、本来、反応的攻撃性の下位因子として報復的意図と怒りが、能動的攻撃性の下位因子として、仲間支配欲求、攻撃有能感、攻撃肯定評価、欲求固執が位置づけられていた。実際にこの

Table 3 SPRAS-H の下位尺度の信頼性と全体・性別の平均と標準偏差

下位尺度名	項目数	$\alpha$ 係数	全 体 $n=2010$		男 子 $n=945$		女 子 $n=1065$		性別の主効果 $F(1, 2008)$
			$M$	$SD$	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
報復意図	7	.88	16.32	5.43	17.47	5.35	15.30	5.29	83.79***
怒り	5	.81	11.66	3.78	11.36	3.73	11.94	3.81	11.77**
仲間支配欲求	7	.87	12.90	4.75	14.19	5.04	11.75	4.16	140.63***
攻撃有能感	8	.82	13.08	4.10	13.83	4.37	12.40	3.71	62.67***
攻撃肯定評価	7	.64	12.96	3.51	14.28	3.50	11.79	3.07	283.77***
欲求固執	5	.75	9.02	3.14	9.40	3.30	8.68	2.95	27.67***

\*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

Table 4 SPRAS-H の下位尺度間相関

	①	②	③	④	⑤	⑥
①報復意図		.48***	.47***	.42***	.21***	.35***
②怒り	.53***		.26***	.25***	.05	.17***
③仲間支配欲求	.47***	.35***		.48***	.21***	.36***
④攻撃有能感	.33***	.21***	.51***		.23***	.27***
⑤攻撃肯定評価	.23***	.08*	.19***	.15***		.24***
⑥欲求固執	.36***	.24***	.34***	.22***	.25***	

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

対角線の下半分は男子  $n=945$ , 上半分は女子  $n=1065$

様な2因子構造があるかを検討するために、6下位尺度得点を観測変数として、検証的因子分析を行った。この時、6下位尺度を観測変数とする1つの潜在変数を想定した1因子モデルと、Figure 1に示す様に、能動的攻撃性と反応的攻撃性の2つの潜在変数から成り、両潜在変数間に相関を想定する斜交2因子モデルを仮定し、全体と男女別に適合度指標を算出して、どちらのモデルがより適合的かを比較することとした。Table 5に示すように、全体、男子、女子いずれにおいても1因子モデルよりも斜交2因子モデルにおいて全ての適合度指標が良好であった。斜交2因子モデルの適合度は、GFI, AGFI, CFIは全て.90を上回ると同時に、RMSEAは.05を若干超える程度にとどまり、十分な値を示し、モデルは支持された。なお2つの潜在変数間の相関は.66～.68であった。

**併存的妥当性の検討** S1の高校生の内、記入漏れのなかった588名(男子308名、女子280名)のデータでSPRAS-Hの6下位尺度の併存的妥当性を検討した。SPRAS-Hの6下位尺度と、敵意、苛立ち、自己中心性、共感的関心の妥当性検証の4測度とのゼロ次の相関係数行列をTable 6に示す。報復意図と怒りにおいては、敵意的攻撃インベントリーの敵意並びに苛立ちと、男女とも予想通り中程度から高い正の有意相関が見られた。一方、能動的攻撃性の4下位尺度でも、予想通り、自己中心性と中程度の正の有意相関を、男子の攻撃有能感以外は、共感的関心と低～中程度の負の

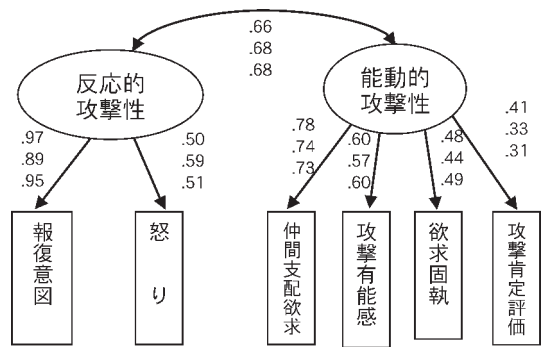


Figure 1 斜交2 因子モデルの標準化係数

注) 誤差は省略した。標準化係数および相関係数は上から全体、男子、女子の順に表記した。

有意相関を示した。

なお、報復意図は自己中心性と中程度の正の有意相関を示し、共感的関心にも負の有意相関を示した。仲間支配欲求、攻撃有能感、欲求固執の能動的攻撃性3下位尺度は、敵意と苛立ちとの間に低い正の有意相関を示した。しかし、これらの相関は併存的妥当性の観点からは直接予期していないものであった。これは能動的攻撃性と反応的攻撃性の間に相関があるために生じた可能性がある。そこで、能動的攻撃性4下位尺度を制御変数として、報復意図と怒りと妥当性検証に用いた4測度との偏相関係数を、反応的攻撃性2尺度

Table 5 SPRAS-Hの高次因子構造についての検証的因子分析

モデル		GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
1因子モデル	全体	.95	.89	.89	.11	201.31
	男子	.96	.89	.88	.12	100.85
	女子	.96	.90	.89	.11	112.54
斜交2因子モデル	全体	.99	.97	.98	.06	15.72
	男子	.99	.97	.98	.06	48.24
	女子	.99	.97	.98	.05	49.15

Table 6 SPRAS-Hと妥当性検証4測度とのゼロ次の相関係数

	敵意		苛立ち		自己中心性		共感的関心	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
報復意図	.41***	.41***	.39***	.48***	.38***	.46***	-.13*	-.34***
怒り	.47***	.50***	.66***	.65***	.35***	.29***	.00	-.15*
仲間支配欲求	.36***	.32***	.33***	.30***	.47***	.46***	-.12*	-.29***
攻撃有能感	.14*	.16**	.28***	.19**	.43***	.39***	-.04	-.24***
攻撃肯定評価	.19***	.14*	.11†	.07	.30***	.36***	-.30***	-.43***
欲求固執	.22***	.25***	.29***	.25***	.52***	.60***	-.24***	-.13*

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

男子  $n = 308$ , 女子  $n = 280$



Table 7 SPRAS-H 各尺度と妥当性検証 4 測度との偏相関係数

	敵意		苛立ち		自己中心性		共感的関心	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
報復意図	.27***	.29***	.21***	.40***	.04	.18**	-.08	-.18**
怒り	.39***	.44***	.59***	.61***	.14*	.16**	.05	-.09
仲間支配欲求	.13*	.14*	.05	.06	.32***	.30***	-.01	-.11†
攻撃有能感	-.06	-.04	.11	-.06	.32***	.22***	.09	-.06
攻撃肯定評価	.16**	.06	.08	-.04	.27***	.27***	-.28***	-.36***
欲求固執	.03	.10†	.12*	.07	.42***	.52***	-.18**	.01

†  $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 男子  $n = 308$ , 女子  $n = 280$ 

報復意図, 怒りと敵意, 苛立ち, 自己中心性, 共感的関心の偏相関は, 仲間支配欲求, 攻撃有能感, 攻撃肯定評価, 欲求固執を制御変数として算出。

仲間支配欲求, 攻撃有能感, 攻撃肯定評価, 欲求固執と敵意, 苛立ち, 自己中心性, 共感的関心との偏相関は, 報復意図と怒りを制御変数として算出。

を制御変数として, 能動的攻撃性 4 下位尺度と妥当性検証に用いた 4 測度との偏相関係数を男女別に算出した。

Table 7 に示すように, 能動的攻撃性 4 下位尺度を制御変数として偏相関を求めると, 反応的攻撃性の 2 下位尺度と, 自己中心性との間にあった .29~.46 の有意相関は, .04~.18 にまで低下した。共感的関心についても, -.34~.00 のゼロ次の負の相関が見られたが, 偏相関は-.18 から .05 となり, 殆ど関連が見られなくなった。以上の結果から, 能動的攻撃性 4 下位尺度の影響を除くと, 反応的攻撃性は敵意と苛立ちとは中程度の相関を示すものの, 自己中心性や共感とは殆ど関連を示さず, ほぼ予想通りの相関のパターンが見られたと言えよう。

一方, 反応的攻撃性 2 下位尺度を制御変数として偏相関を求めると, 能動的攻撃性 4 下位尺度と敵意及び苛立ちとの間の予想外のゼロ次の正の有意相関の多くが, 有意でなくなるか .10 代の低い相関にとどまり, 敵意や苛立ちとは関連が殆どないことが明らかになった。その一方で, 自己中心性とは, 男女ともすべての尺度で中程度の有意な正の偏相関が見られた。共感的関心とは攻撃肯定評価で依然として負の有意な偏相関が見られたが, 仲間支配欲求と攻撃有能感で見られたゼロ次の負の有意相関の多くは有意とならなかった。以上の様に, 反応的攻撃性の影響を除外すると, 能動的攻撃性 4 下位尺度は, 共感的関心については攻撃肯定評価のみに正の相関が限定されたが, 自己中心性とは全ての下位尺度で正の相関が維持され, 敵意や苛立ちの相関は無相関か低い値に抑えられ, ほぼ予想通りの結果が得られた。

攻撃行動との関連の検討 能動的攻撃性および反応

Table 8 能動的・反応的攻撃性と攻撃行動との関連

説明変数/基準変数	身体的攻撃		関係性攻撃	
	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$
性別	-.19***	-.37***	.02	-.16***
報復意図	.24***	.49***	.21***	.45***
怒り	.18***	.33***	.13***	.32***
仲間支配欲求		.38***	.22***	.44***
攻撃有能感	.13***	.35***	.12***	.35***
攻撃肯定評価	.27***	.45***	.13***	.28***
欲求固執		.27***		.27***
$R^2$	.42		.30	
$F$	186.13***		94.37***	
自由度	5,1291		6,1290	

†  $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

性別は男子を 1, 女子を 2 とコーディング。

重回帰分析はステップワイズ法によった。

的攻撃性と攻撃行動との関連を検討するため, S2 のデータを用いて, 身体的暴力, 関係性攻撃を従属変数, 性別 (男子=1, 女子=2) と SPRAS-H の 6 下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行った (Table 8)。その結果, 身体的暴力については性別が負の有意な関連を示し, これらによって身体的暴力尺度の全分散の 42% が説明された。一方, 関係性攻撃は, 報復意図, 怒り, 仲間支配欲求, 攻撃有能感, 攻撃肯定評価がいずれも正の有意な関連を示し, これらの変数によって関係性攻撃尺度の全分散の 30% が説明されることが明らかとなった。

攻撃性による類型化と類型の特徴 SPRAS-H の 6 下位尺度に欠損値のない S1, S2 合計 1,880 名<sup>2</sup>のデータを用いて, SPRAS-H の 6 下位尺度の標準得点に対して K-means 法によるクラス分析を行った<sup>3</sup>。

3 クラスタ解から6 クラスタ解まで算出し、解釈可能性の観点から5 クラスタ解を採用した。Figure 2 に各尺度の最終クラスタ中心をクラスタごとに示す。クラスタ1はSPRAS-Hの全ての下位尺度の得点が低く、低攻撃性群と解釈された。クラスタ2は攻撃肯定評価だけが高く、他は全て平均以下で、高攻撃評価群と解釈された。第3クラスタは特に欲求固執が高い高欲求固執群、第4クラスタは報復的意図と怒りが高い高反応的攻撃性群、第5クラスタは能動的攻撃性、反応的

攻撃性共に高い高攻撃性群と解釈された。S1とS2を合わせた各クラスタの男女別人数の内訳はTable 9に示す通りであった。 $\chi^2$ 検定の結果は有意で( $\chi^2(4)=188.24, p<.001$ )、残差分析の結果、低攻撃性群は有意に女子で多く、高攻撃評価群、高欲求固執群、高攻撃性群においては有意に男子が多かった。SPRAS-H以外の全ての尺度の得点を標準得点化し、S1サンプルについては、敵意、苛立ち、自己中心性、共感的関心、気持ちの想像を従属変数として、S2サンプルについ

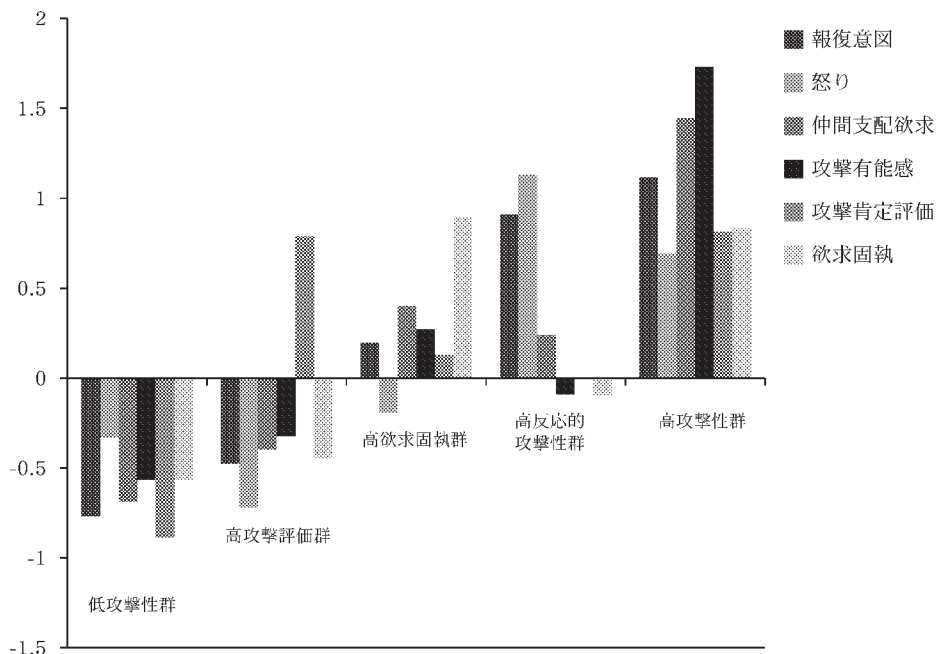


Figure 2 能動的・反応的攻撃性5類型の最終クラスタ中心

Table 9 攻撃性群の人数内訳

		C11	C12	C13	C14	C15	合計
男子	人数	148	222	204	155	151	880
	調整済み残差	-12.40***	5.90***	2.80**	-0.20	7.30***	
女子	人数	433	144	179	180	64	1000
	調整済み残差	12.40***	-5.90***	-2.80**	0.20	-7.30***	
	合計	581	366	383	335	215	1880

C11: 低攻撃性群 C12: 高攻撃評価群 C13: 高欲求固執群 C14: 高反応的攻撃性群  
C15: 高攻撃性群

\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$

<sup>2</sup> サンプルの内訳は以下の通り。S1 1年生男子126名、女子126名；2年生男子111名、女子112名；3年生男子69名、女子42名；S2 1年生男子217名、女子253名；2年生男子229名、女子285名；3年生男子128名、女子182名。

<sup>3</sup> S1とS2で能動的・反応的攻撃性全6下位尺度の平均値の差の検討を多変量分散分析により行ったところ、群の多変量主効果は有意とならず (Wilksの $\lambda=0.995$ ,  $F(5,1874)=1.91$ ,  $p<.10$ )、2つのサンプルは能動的・反応的攻撃性において等質とみなすこととした。

ては身体的攻撃、関係性攻撃、向社会的行動、肯定的主張を従属変数として、クラスタ×性別の MANOVA を実施した。その結果、S1, S2 とともに性別とクラスタの多変量主効果が有意となった (S1 性別; Wilks の  $\lambda=0.90$ ,  $F(5,572)=12.72$ ,  $p<.001$ : クラスタ; Wilks の  $\lambda=0.55$ ,  $F(20,1898)=18.83$ ,  $p<.001$ 。S2 性別; Wilks の  $\lambda=0.83$ ,  $F(4,1281)=66.09$ ,  $p<.001$ : クラスタ; Wilks の  $\lambda=0.70$ ,  $F(16, 3914.16)=30.80$ ,  $p<.001$ )。単一変量の分散分析の結果、敵意と関係性攻撃を除く全ての尺度でクラスタと性別の主効果が有意となった (Table 10)。テューキーの HSD 法による多重比較の結果、高攻撃性群は、共感的関心で高攻撃評価群と並んで 5 群中最低で、加えて敵意、苛立ちは高反応の攻撃性群と並んで、自己中心性は単独で最も高く、身体的暴力と関係性攻撃も 5 群中最高であった。高反応の攻撃性群は、敵意・苛立ちといった反応の攻撃性を表す内的特性は高攻撃性群並みに高いものの、自己中心性と共感性の 2 尺度は平均的な水準にとどまった。身体的暴力・関係性攻撃とも、高攻撃性群に次ぐ 2 番目の高さを示したが、値自体は .33, .31 程度にとどまった。高欲求固執群は自己中心性がやや高く、関係性攻撃は若干平均を上回るものの、その他の特性はほぼ平均的な水準を示した。高攻撃評価群は苛立ちと敵意が 5 群中最低で、自己中心性、身体的暴力、関係性攻撃では低攻撃性群に次ぐ低さを示したが、共感 2 特性が高攻撃群と同程度に低く、共感の低さと怒り感情の低さが目立つ群であった。低攻撃性群は敵意、自己中心性、身体的暴力、関係性攻撃で 5 群中最も低く、共感 2 特性と向社会的行動および肯定的主張で最も高い群であった。

## 考 察

SPRAS-H の因子パタン 探索的因子分析の結果、

信頼性が低かったためにあらかじめ除外された外資的認知を除き、濱口 (2005b)、濱口 (2007) の原尺度通りの因子が抽出された。さらに、検証的因子分析の結果、仲間支配欲求、攻撃有能感、欲求固執、攻撃肯定評価の 4 因子が能動的攻撃性を、報復意図、怒りの 2 因子が反応的攻撃性を構成する斜交 2 因子モデルが良好な適合度を示し、濱口他 (2009) 同様、能動的攻撃性・反応的攻撃性の斜交 2 因子仮説が支持された。元来この 2 つの攻撃性概念は、能動的攻撃、反応的攻撃のそれぞれを引き起こす内的特性として構想されており (濱口, 2005a)、内容自体に中高生の発達差は仮定されていないので、本研究の結果は自然なものである。両因子の相関は .66~.68 であり、同じ尺度を使用した我が国の中学生の相関とも (.69)、行動の観点から能動的・反応的攻撃を測定する海外の尺度とも (Cima et al., 2013 で .69) ほぼ同程度であった。児童の教師評定の行動測定では、両尺度の相関はかなり高い ( $r=.79$ , Dodge & Coie, 1987;  $r=.82$ , Poulin & Boivin, 2000a)。行動を尋ねる尺度でも Raine et al. (2006) の様に、行為者の意図も合わせて尋ねるものや、本研究の尺度の様に内的特性を測定する尺度ならば、2 種類の攻撃性は動機又は生起メカニズムの違いがより明確になり、客観的な行動測定より独立性が高くなるものと考えられる。

SPRAS-H の信頼性・妥当性と性差 SPRAS-H の信頼性は内的整合性の観点から検討された。攻撃肯定評価で  $\alpha$  係数が .64 と低いものの、それ以外は全て .75 以上の値が得られ、高い信頼性が確認された。攻撃肯定評価は、身体、言語、関係性の 3 種類に亘る攻撃行動を取り上げ、かつ、それぞれの善悪の判断や多様な否定的影響など、内包の広い概念である。そのため、内容的妥当性を保とうとすると等質性が下がりやすくなると考えられる。一次元性の尺度として成り立たせ

Table 10 クラスタ間の心理的特徴の差異

標本	尺度	一変量 ANOVA 主効果 ( $F$ 値)					群間差	
		CI1	CI2	CI3	CI4	CI5	クラスタ	性別
S1	敵意	-0.37	-0.38	0.07	0.57	0.56	27.71***	<1 ns
	苛立ち	-0.27	-0.61	0.02	0.68	0.67	42.27***	9.24**
	自己中心性	-0.66	-0.20	0.41	0.16	0.98	50.05***	4.95*
	共感的関心	0.55	-0.35	-0.02	-0.03	-0.60	17.86***	48.01***
	気持ちの想像	0.37	-0.37	0.01	-0.03	-0.19	6.45***	14.64***
S2	身体的攻撃	-0.56	-0.07	0.02	0.33	1.16	77.05***	95.62***
	関係性攻撃	-0.51	-0.18	0.14	0.31	0.99	72.52***	<1 ns
	向社会的行動	0.22	-0.26	-0.11	-0.06	0.09	5.07***	164.87***
	肯定的主張	0.36	-0.31	-0.09	-0.13	-0.09	14.96***	87.83***
								CI2<CI4=CI3=CI5<CI1/M<F

CI1: 低攻撃性群 CI2: 高攻撃評価群 CI3: 高欲求固執群 CI4: 高反応の攻撃性群 CI5: 高攻撃性群

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

るにはこの程度の信頼性にならざるを得ないように思われる。

次に SPRAS-H の併存的妥当性について考察する。まず反応的攻撃性の報復意図と怒りの 2 下位尺度は、敵意攻撃インベントリーの敵意と苛立ちと、ともに中程度の正の有意相関が見られた。これらの有意な関連は、能動的攻撃性 4 下位尺度を制御変数として求めた偏相関でも、やや値が低下するものの維持された。敵意は周囲の人々を敵視する傾向を、苛立ちは少しの刺激で怒りやすい傾向を示し、共に反応的攻撃性の構成要素を測定する尺度と考えられる(濱口, 2005a)。報復意図と怒りは、能動的攻撃性 4 下位尺度を制御変数とした偏相関を求めると、自己中心性とも共感的関心ともいずれも低い値にとどまり、能動的攻撃性 4 下位尺度の影響を除外すれば、妥当性検証の諸測度とほぼ予想通りの相関のパターンが見られ、併存的妥当性が確認されたと言えよう。

一方、能動的攻撃性の 4 下位尺度は、予想通り、自己中心性と中程度の正の有意相関を示した。反応的攻撃性の 2 尺度を制御変数として求めた偏相関でも、自己中心性とは男女とも 4 下位尺度全てで有意であり、能動的攻撃性 4 下位尺度と自己中心性との関連性は頑健であった。能動的攻撃性は、自己の目標達成のために他者を傷つける傾向の強さを意味するものであり、自己中心性の強さと密接な関係がある。反応的攻撃性 2 下位尺度の影響を除外した上でなお自己中心性と関連を示したことは、能動的攻撃性 4 下位尺度の併存的妥当性の 1 つの重要な根拠と言える。また、能動的攻撃性は共感的関心と負の相関が予想され、実際に男子の攻撃有能感を除いて、全てで共感的関心と低～中程度の負の有意相関が見られた。しかし、反応的攻撃性 2 下位尺度を制御して偏相関を求めると、有意な関連を示したのは攻撃肯定評価と男子の欲求固執のみにとどまり、仲間支配欲求と攻撃有能感とは無相関となった。攻撃肯定評価や欲求固執には、攻撃行動が仲間の蔑視や嫌悪をもたらしたり、相手に苦痛を与えても気にならない冷酷さや、強引な奪取による人心への悪影響への無関心を表す項目を多く含んでいるため、共感的関心と負の偏相関が見られたと思われる。仲間支配欲求や攻撃有能感の諸項目は、他者を支配して自己の目標を達成すること、人を攻撃することによって得られる利得等の道具的関心に焦点が当てられているために共感的配慮との偏相関が有意にならなかったものと思われる。なお、反応的攻撃性 2 下位尺度を制御変数として算出された、能動的攻撃性 4 下位尺度と敵意並

びに苛立ちとの偏相関を見ると、多数見られていたゼロ次の正の有意相関の多くが有意でなくなり、有意なものでも .10 代の低い相関にとどまった。能動的攻撃性 4 下位尺度と敵意・苛立ちとの間に見られたゼロ次の有意相関は、その殆どが反応的攻撃性 2 下位尺度との相関の高さによってもたらされていた可能性が高い。以上、能動的攻撃性 4 下位尺度は、共感的関心においてはやや限定された結果にとどまったが、自己中心性ではほぼ予想された通りの相関が見られ、一定の併存的妥当性が確認された。自己愛 (Raskin & Terry, 1988) やサイコパシー傾向 (Frick, O'Brien, Wootton, & McBurnett, 1994) など、能動的攻撃性との関連が示唆される他のパーソナリティ特性との関連を調べる中で、今後も引き続き能動的攻撃性 4 下位尺度の併存的妥当性を検討する必要がある。

次に能動的・反応的攻撃性の性差について考察する。全ての下位尺度で性差が有意となり、怒りを除く全ての下位尺度で男子の方が高かった。これは中学生を対象とした濱口 (2005b)、濱口 (2007) と同様の結果である。Maccoby (1990) によれば、男子は女子よりも、仲間関係において他者に対する優位性を求める傾向が強く、女子は男子よりも親密な関係の形成と維持を求める傾向が強い。事実、中学生から大学生の仲間関係に対する感情・欲求・行動を調査した榎本 (1999, 2000) では、女子は男子よりも親和欲求と相互尊重欲求、信頼・安定感が高く、相互理解活動や親密確認活動が多いこと、男子は女子よりライバル意識が高いことが明らかにされている。反応的攻撃性も能動的攻撃性も、ともに仲間を傷つける行動を導く内的特性であるので、おおむね女子の方が男子より低いという本研究の結果は、青年期女子の仲間に対する親和性の高さを示す上述の先行研究と一致した結果であると言えよう。怒りはわずかに女子の方が高かったが、これも中学生対象の濱口 (2007) と同じ結果であった。この怒りの下位尺度の項目は、「怒りは長く続く方だ」など怒り持続性の項目が 5 項目中 3 項目を占める。怒りの維持については、わずかではあるが男子より女子の方が高いことが大学生を対象とした遠藤・湯川 (2012, 2013) でも報告されており、青年期において一般的な傾向と言えるかもしれない。今後は怒りの維持の性差が現れる機序についてさらに検討する必要がある。

**攻撃行動との関連** 性別と SPRAS-H の 6 下位尺度を独立変数、身体的暴力と関係性攻撃を従属変数として、ステップワイズ重回帰分析を行った。性別と能動的・反応的攻撃性を含めて説明率は身体的暴力で



42%, 関係性攻撃で30%に達した。大学生を対象として実施された同様の研究では(関根・濱口・藤原・西澤・桑原・三鈺, 2009), 能動的・反応的攻撃性により, 身体的攻撃は30%, 関係性攻撃は34%が説明され, 使用する尺度が違っていてもおよそ同程度の説明率であった。攻撃行動への説明率を高めるために, 社会的情報処理(social information-processing; Crick & Dodge, 1994; Lemerise & Arsenio, 2000)など, 場面特異的に作用する認知・感情的諸変数を含める必要があると考えられる。例えば能動的・反応的攻撃性を独立変数, 社会的情報処理を媒介変数, 攻撃行動を従属変数とする中学生対象の研究では, 攻撃性と社会的情報処理を併せて報復的攻撃に74%の説明率を示している(濱口・桑原・藤原・西澤・関根, 2008)。能動的攻撃性・反応的攻撃性は直接的に攻撃行動を規定するだけでなく, 社会的情報処理を介して間接的にも攻撃行動を規定するという仕方で行動への影響力を示すものと考えられる。今後は高校生においても, 社会的情報処理を含めたモデルでの検討が望まれる。

SPRAS-Hの各下位尺度の攻撃行動との関連についてであるが, 身体的暴力と関係性攻撃のどちらに対しても, 報復意図と怒りの2つの反応的攻撃性下位尺度と, 攻撃有能感と攻撃肯定評価の2つの能動的攻撃性下位尺度が正の有意な関連を示した。他者から何らかの被害を受けた場面で, 報復意図を持つ傾向が強いほど, また怒りを経験する傾向が強いほど, 暴力や関係性攻撃で報復しやすくなるのは, 先行研究で明らかにされており(濱口, 1992; 日比野・湯川, 2004; 湯川・日比野, 2003), これらの要因が反応的攻撃としての身体的攻撃や関係性攻撃を導く内的特性であることが改めて確認された。攻撃有能感は, 他者と葛藤状態になった時に, 自分が言語的, 身体的, 関係性の各種攻撃を行うことで相手を黙らせ, 有利に解決できる自信の強さを示すものである。攻撃行動を多く行う者は攻撃行動への自己効力や結果予期が高いことが知られており(Crick & Werner, 1998; Perry, Perry, & Rasmussen, 1986), 本研究の結果はこうした先行研究と一致したものである。攻撃肯定評価の高さは, 攻撃行動に対する規範意識の低さを表しており, 特にこの尺度の内容は, 攻撃行動の結果の有害さを低く見積もる項目が多く, Bandura, Barbarnanelli, Capara, & Pastorelli (1996)が言う道徳不活性(moral disengagement)の中の, 「行為の結果の過小評価・無視または誤った解釈」に対応している。道徳不活性は, 中高生の攻撃行動の予測因となることが明らかにされていることから(Barchia & Bussey, 2011), 本

研究の攻撃肯定評価の結果は道徳不活性の反映されたものと解釈できる。身体的暴力に対しては, 性別が負(男子が1, 女子が2と符合化)の有意な関連を示した。男子の方が身体的攻撃を行いやすいという結果は, 発達段階を越えて多くの先行研究と一致しており(安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999; Crick & Grotpeter, 1995; 秦, 1990), 本研究でも同様の結果がえられた。また, 特に関係性攻撃には, 仲間支配欲求が正の有意な関連を示した。仲間支配欲求は, 仲間を道具として利用したいという欲求の強さを表しており, 関係性攻撃は相手の人間関係を操作することにより傷つける行動である。相手の優位に立ち, 相手を利己的にコントロールしようとする傾向が強いという点で両者は共通しており, そのため有意な関連が現れたものと思われる。なお, 本研究では身体的暴力も関係性攻撃も, 攻撃行動は自己報告形式の質問紙によって測定された。今後, 能動的攻撃性と反応的攻撃性の攻撃行動への検討においては, 実験室実験や自然観察での攻撃行動の指標, 他者指名・評定による攻撃行動の指標なども含めて検討する必要がある。

**攻撃性類型について** SPRAS-Hの6下位尺度に対するクラスタ分析の結果, 高攻撃性群, 高反応的攻撃性群, 高欲求固執群, 高攻撃評価群, 低攻撃性群の5群が見出された。Crapanzano et al. (2010)の「重篤モデル」における能動・反応両高群は, 本研究における高攻撃性群に該当する。高攻撃性群は, 敵意, 苛立ちといった反応的攻撃性の特性こそ高反応的攻撃性群と同程度であるものの, 自己中心性, 共感, 身体的攻撃, 関係性攻撃は高反応的攻撃性群と大きな差があり, 5群中攻撃性が最も重篤な群であった。また, 高反応的攻撃性群は低攻撃性群, 高攻撃評価群, 高欲求固執群よりも, 敵意と怒り, 身体的暴力と関係性攻撃が有意に高く, 高攻撃性群に次いで2番目に攻撃性の高い不適応的な群であることが確認された。Table 10に示す様に, 身体的攻撃と関係性攻撃が高く, 行動として攻撃性が表出されている群は高攻撃性群と高反応的攻撃性群のみであった。

本研究では行動面を含めて攻撃性が低い群が低攻撃性群と高攻撃評価群の2つが発見された。低攻撃性群は, 内面的にも行動的にも攻撃性が最も低く, 共感, 向社会的行動, 肯定的主張といった望ましい社会性を5群中最も備えた適応的な群である。これに対して, 高攻撃評価群は, 他者に対して怒りの感情を抱くことも, 攻撃的な言動を行うことも少ないが, 冷淡・不親切で, 最も攻撃的な群の生徒と同程度に攻撃行動に対

して肯定的な考えを持つ非社会的な群である。低攻撃性群と高攻撃評価群の2つの群は、小学校高学年児童1,100名余りを対象としてクラスタ分析を行った濱口・江口(2009)の穏健群と低主張群にそれぞれ対応していると思われる。穏健群はやや高い肯定的主張と向社会的行動、そして低い攻撃行動を特徴としており、低攻撃性群と類似している。濱口・江口(2009)では、能動的・反応的攻撃性は測定されておらず、低主張群の子ども達が攻撃行動を肯定的に評価する傾向が強いかは定かではない。しかし濱口・江口(2009)の低主張群は、肯定的主張を含む主張行動全般と向社会的行動が高攻撃群並みに低く、身体的攻撃・関係性攻撃とも平均をやや下回る水準という行動プロフィールの特徴において、本研究の高攻撃評価群と類似している。高攻撃評価群がなぜ攻撃行動への肯定的評価を持つのかは不明だが、他者との肯定的な相互作用経験の不足から適切な道德観の形成が抑制された結果かと推察される。以上の様に、児童期と青年期とで発達段階は異なるが、攻撃性の低いタイプに性質の異なる2つのタイプがあることが改めて確認された。

高欲求固執群は、欲求固執が目立って高く、仲間支配欲求と攻撃有能感がやや高い、能動的攻撃性が優勢な群である。この群は自己中心的で、仲間を道具的に利用しようとする傾向が目立つが、関係性攻撃はほぼ平均的水準で、高攻撃群や高反応的攻撃性群ほどその攻撃性は顕著ではない。平易に言えば、「欲張りでわがままな」生徒という表現がよく適合する群である。行動面での逸脱が大きくないことから、この群の生徒は、従来の高能動的攻撃群と同一と言えるかは疑問である。今後、この群については、社会的スキルや仲間関係、外在的問題を含めて検討を続ける必要がある。

クラスタ分析の結果、以上の様に能動的攻撃性・反応的攻撃性共に高く、最も攻撃行動の表出が多い高攻撃性群、そして反応的攻撃性のみが高く、攻撃行動の表出が2番目に多い高反応的攻撃性群という重篤度の異なる2つの攻撃的なタイプが発見されたこと、一部の能動的攻撃性のみが高い群は攻撃行動が平均かそれ以下の水準にとどまり攻撃的なタイプとは直ちにみなせないことから、本研究の結果はCrapanzano et al. (2010)やStickley et al. (2012)の重篤度モデルを支持するものと言える。

本研究では、高校生の攻撃性を、能動的攻撃性と反応的攻撃性という内的特性の観点から多面的に測定できる一定の信頼性と妥当性を備えた尺度が開発された。さらに、身体的攻撃と関係性攻撃の生起に関与する能

動的・反応的攻撃性の側面を明らかにすることができ、能動的攻撃性・反応的攻撃性の観点から高校生が5タイプの類型に分かれることも示された。これらの知見により、高校生の攻撃性を内面的な特徴の観点から理解する新しい視点が提供できたと思われる。例えば、攻撃行動が目立つ高校生にSPRAS-Hを用いたアセスメントを行うことにより、攻撃児のタイプや問題を抱える内的特性を特定し、その情報に基づく有効な心理臨床的介入プログラムの作成と効果検証が可能となろう。今後は、非行、いじめ、デートDV等の反社会的問題行動や抑うつ等の内在化問題、学校不適応など高校生の様々な心理社会的な不適応との関連を検討し、知見を積み重ねることにより、さらに多くの臨床的示唆が得られるものと思われる。

## 引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392. (Ando, A., Soga, S., Yamasaki, K., Shimai, S., Shimada, H., Utsuki, S., Oashi, O., & Sakai, A. (1999). Development of the Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ). *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 384-392.)
- Arsenio, W. F., & Lemerise, E. A. (2001). Varieties of childhood bullying: Values, emotion processes and social competence. *Social Development*, **10**, 59-73.
- Bandura, A., Barbarnanelli, C., Capara, G., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 364-374.
- Barchia, K., & Bussey, K. (2011). Individual and collective social cognitive influences on peer aggression: Exploring the contribution of aggression efficacy, moral disengagement, and collective efficacy. *Aggressive Behavior*, **37**, 107-120.
- Brendgen, M., Vitaro, F., Tremblay, R. E., & Lavoie, F. (2001). Reactive and proactive aggression: Predictions to physical violence in different contexts and moderating effects of parental monitoring and caregiving behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **29**, 293-304.

- Cima, M., Raine, A., Meesters, C., & Popma, A. (2013). Validation of the Dutch Reactive Proactive Questionnaire (RPQ): Differential correlates of reactive and proactive aggression from childhood to adulthood. *Aggressive Behavior*, **39**, 99-113.
- Crapanzano, A. M., Frick, P. J., & Terranova, A. M. (2010). Patterns of physical and relational aggression in a school-based sample of boys and girls. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **38**, 433-445.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Crick, N. R., & Werner, N. (1998). Response decision processes in relational and overt aggression. *Child Development*, **69**, 1630-1639.
- Day, D. M., Bream, L. A., & Pal, A. (1992). Proactive and reactive aggression: An analysis of subtypes based on teacher perceptions. *Journal of Clinical Child Psychology*, **21**, 210-217.
- Dodge, K. A. (1991). The structure and function of reactive and proactive aggression. In D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression* (pp. 201-218). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Earlbaum.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1146-1158.
- Dodge, K. A., Lochman, J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E., & Pettit, G. S. (1997). Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 37-51.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. (1992). Emotion, regulation, and the development of social competence. In M. S. Clark (Ed.), *Review of personality and social psychology*. Vol. 14. *Emotion and social behavior* (pp. 119-150). Newbury Park, CA: Sage.
- 遠藤寛子・湯川進太郎 (2012). 怒りの維持過程—認知および行動の媒介的役割— 心理学研究, **82**, 505-513. (Endo, H., & Yukawa, S. (2012). The mediating roles of cognition and behavior in the process of maintaining anger. *Japanese Journal of Psychology*, **82**, 505-513.)
- 遠藤寛子・湯川進太郎 (2013). 怒りの維持過程における思考の未統合感に影響を及ぼす諸要因の検討 心理学研究, **84**, 458-467. (Endo, H., & Yukawa, S. (2013). Factors influencing the sense of un-integration of thoughts in maintaining anger. *Japanese Journal of Psychology*, **84**, 458-467.)
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, **47**, 180-190. (Enomoto, J. (1999). Socio-emotional development of friendship among adolescents: Activities with friends and the feeling for friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 180-190.)
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453. (Enomoto, J. (2000). Friendship among adolescents: Needs and their relation to emotions and activities. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 444-453.)
- Feshbach, S. (1964). The function of aggression and the regulation of aggressive drive. *Psychological Review*, **71**, 257-272.
- Frick, P. J., O'Brien, B. S., Wootton, J. M., & McBurnett, K. (1994). Psychopathy and conduct problems in children. *Journal of Abnormal Psychology*, **103**, 700-707.
- 藤 桂・吉田富二雄 (2014). ネットいじめ被害者における相談行動の抑制—脅威認知の観点から— 教育心理学研究, **62**, 50-63. (Fuji, K., & Yoshida, F. (2014). Cognition of threat and suppression of consulting behavior by victims of cyberbullying. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **62**, 50-63.)
- 濱口佳和 (1992). 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動に関する研究 教育心理学研究, **40**, 224-231. (Hamaguchi, Y. (1992). A research on relationships between children's social cognition and their reactive behaviors in a pro-



- vocative situation. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **40**, 224-231.)
- 濱口佳和 (2005a). 能動的攻撃・反応的攻撃の概念定義と測定法に関する考察—青年期における能動的攻撃・反応的攻撃の個人差測定尺度開発に向けて—教育相談研究, **43**, 27-36. (Hamaguchi, Y. (2005a). The consideration on the definition and measures of proactive and reactive aggression: Toward the construction of proactive and reactive aggressiveness scales for adolescents. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **43**, 27-36.)
- 濱口佳和 (2005b). 自記式能動的攻撃性尺度(中学生用)の構成 カウンセリング研究, **38**, 183-194. (Hamaguchi, Y. (2005b). Study on construction of the self-report type proactive aggression scales for junior high school students. *Japanese Journal of Counseling Science*, **38**, 183-194.)
- 濱口佳和 (2007). 自記式反応的攻撃性尺度(中学生用)の構成 カウンセリング研究, **40**, 136-145. (Hamaguchi, Y. (2007). The study on construction of self-report type reactive aggression scales for junior high school students. *Japanese Journal of Counseling Science*, **40**, 136-145.)
- 濱口佳和・江口めぐみ (2009). 児童の主張行動と仲間関係の適応との関連—アサーションは本当に児童の仲間関係の適応に役立つのか?— カウンセリング研究, **42**, 60-70. (Hamaguchi, Y., & Eguchi, M. (2009). The association between children's assertive behavior and their adjustment to peer relationships: Do children's assertive behaviors really contribute to their adjustment to peer relationships? *Japanese Journal of Counseling Science*, **42**, 60-70.)
- 濱口佳和・石川満佐育・三重野祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連—2種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連— 教育心理学研究, **57**, 393-406. (Hamaguchi, Y., Ishikawa, M., & Mieno, S. (2009). Proactive-reactive aggressiveness and psycho-social maladjustment in junior high school students: Types of aggressiveness, desire for anti-social behavior, and depressive tendencies. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **57**, 393-406.)
- 濱口佳和・桑原千明・藤原健志・西澤千枝美・関根千恵 (2008). 中学生の能動的・反応的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理ならびに応答的行動との関連(2)—社会的情報処理媒介モデルの検討— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 116. (Hamaguchi, Y., Kuwabara, C., Fujiwara, T., Nishizawa, C., & Sekine, C.)
- 秦 一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**, 227-234. (Hata, K. (1990). Construction of an inventory for assessing different modes of hostile aggression. *Japanese Journal of Psychology*, **61**, 227-234.)
- 日比野 桂・湯川進太郎 (2004). 怒り経験の鎮静化過程—感情・認知・行動の時系列的変化— 心理学研究, **74**, 521-530. (Hibino, K., & Yukawa, S. (2004). The calming process of anger experience: Time series changes of affects, cognitions, and behaviors. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 521-530.)
- 警視庁生活安全部少年育成課 (2013). 少年非行の傾向 Retrieved from <http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/hikou/hikou25.pdf> (2015年2月18日)
- 警察庁生活安全局少年課 (2014). 少年非行情勢(平成26年上半年)平成26年8月 Retrieved from <https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikou-jousei/H26.pdf> (2015年2月18日)
- 近藤日夫 (2004). 非行接近/抑制尺度の作成及び非行との関連の検討 犯罪心理学研究, **42**, 1-14. (Kondo, H.)
- Lemerise, E. A., & Arsenio, W. F. (2000). An integrated model of emotion process and cognition in social information processing. *Child Development*, **71**, 107-118.
- Little, T. D., Jones, S. M., Henrich, C. C., & Hawley, P. H. (2003). Disentangling the “whys” from the “whats” of aggressive behavior. *International Journal of Behavioral Development*, **27**, 122-133.
- Maccoby, E. (1990). Gender and relationships. *American Psychologist*, **45**, 513-520.
- 文部科学省 (2014). 平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省2014年12月19日 Retrieved from <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=00000105597>



- 2&cycode=0 (2015年2月18日)
- Perry, D. J., Perry, L. C., & Rasmussen, P. (1986). Cognitive social learning mediators of aggression. *Child Development*, **57**, 700-711.
- Poulin, F., & Boivin, M. (2000a). Reactive and proactive aggression: Evidence of a two-factor model. *Psychological Assessment*, **12**, 115-122.
- Poulin, F., & Boivin, M. (2000b). The role of proactive and reactive aggression in the formation and development of boys' friendships. *Developmental Psychology*, **36**, 233-240.
- Raine, A., Dodge, K. A., Loeber, R., Gatzke-Kopp, L., Lynam, D., Reynolds, C., ... Liu, J. (2006). The Reactive-Proactive Aggression Questionnaire: Differential correlates of reactive and proactive aggression in adolescent boys. *Aggressive Behavior*, **32**, 159-171.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
- 櫻井良子 (2002). 中学生における関係性攻撃の特徴 筑波大学心理学研究科中間論文(未公開) (Sakurai, R.)
- Seah, S. L., & Ang, R. P. (2008). Differential correlates of reactive and proactive aggression in Asian adolescents: Relations to narcissism, anxiety, schizotypal traits, and peer relations. *Aggressive Behavior*, **34**, 553-562.
- 関根千恵・濱口佳和・藤原健志・西澤千枝美・桑原千明・三鈺泰代 (2009). 大学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連III—能動的・反応的攻撃性と攻撃的行動傾向との関連の検討— 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 449. (Sekine, C., Hamaguchi, Y., Fujiwara, T., Nishizawa, C., Kuwabara, C., & Sanko, Y.)
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, **12**, 123-134. (Shibahashi, Y. (2001). Self-expression and expectation of friends' expression in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **12**, 123-134.)
- Stickle, T. R., Marini, V. A., Thomas, J. N. (2012). Gender differences in psychopathic traits, types, and correlates of aggression among adjudicated youth. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **40**, 513-525.
- Swogger, M. T., Walsh, Z., Houston, R., Cashman-Brown, S., & Conner, K. R. (2010). Psychopathy and axis I psychiatric disorders among criminal offenders: Relationships to impulsive and proactive aggression. *Aggressive Behavior*, **36**, 45-53.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達—多次元的視点による検討— 発達心理学研究, **14**, 136-148. (Tobari, M. (2013). The development of empathy in adolescence: A multi dimensional view. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **14**, 136-148.)
- Vitaro, F., Gendreau, P. L., Tremblay, R. E., & Oligny, P. (1998). Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problems. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **39**, 377-385.
- 横浜市民生活力推進局 (2008). デートDVについての意識・実態調査報告書 横浜市広報印刷物登録第190722号 (Yokohama city)
- 横塚怜子 (1989). 向社会的行動尺度(中高生版)作成の試み 教育心理学研究, **37**, 158-162. (Yokotsuka, R. (1989). An attempt to construct a scale of prosocial behavior for high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **37**, 158-162.)
- 湯川進太郎・日比野 桂 (2003). 怒り経験とその鎮静化過程 心理学研究, **74**, 428-436. (Yukawa, S., & Hibino, K. (2003). Anger experience and the process of calming down. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 428-436.)
- Xu, Y., Farver, J. M., & Zhang, Z. (2009). Temperament, harsh and indulgent parenting, and Chinese children's proactive and reactive aggression. *Child Development*, **80**, 244-258.

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました茨城県南部地域の多くの高等学校の生徒の皆さん・先生方に深く感謝申し上げます。

(2015.3.18 受稿, '15.10.2 受理)

*Proactive-Reactive Aggressiveness in High School Students:  
Scale Construction, Examination of Relations to Physical and  
Relational Aggression, Exploration of Subtypes*

YOSHIKAZU HAMAGUCHI (FACULTY OF HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND

TAKESHI FUJIWARA (FACULTY OF HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2016, 64, 59—75

In the present study, the Proactive-Reactive Aggressiveness Scales for High School Students (SPRAS-H), a self-report scale, was developed, and relationships between proactive-reactive aggressiveness and physical and relational aggression were investigated, as were subtypes of proactive-reactive aggressiveness and their psychological features. High school students ( $N=2,010$ ) completed a questionnaire. Exploratory factor analysis of their responses revealed that SPRAS-H had the exact same 6-factor structure as the Proactive-Reactive Aggressiveness Scales for Junior High School Students (SPRAS-J). Additional confirmatory factor analysis indicated high goodness-of-fit indices for the oblique 2-factor model of proactive and reactive aggressiveness. All subscales of the SPRAS-H showed sufficient reliability and concurrent validity. Multiple regression analysis revealed that 40% of the variance in physical aggression and 30% of the variance in relational aggression could be explained by gender and proactive-reactive aggressiveness. Cluster analysis indicated that there were 2 types of highly aggressive subgroups. The extremely aggressive subgroup had high scores on both the proactive and reactive aggressiveness subscales, whereas the reactively aggressive subgroup had high scores only on the reactive aggressiveness subscale. These results provide support for Crapanzano's severity model (Crapanzano, Frick, & Terranova, 2010).

Key Words: proactive-reactive aggressiveness, physical aggression, relational aggression, severity model, high school students